

## 国家構想の展開と木戸孝允

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2013-05-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 落合, 弘樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/14585">http://hdl.handle.net/10291/14585</a>

である吉田松陰や、長州諸隊を率い倒幕に奔走した高杉晋作、明治国家をリードした伊藤博文、山県有朋に比べると、木戸孝允の位置づけは必ずしも明確ではない。また、彼を直接の素材とする研究も、大正期における妻木忠太『松菊木戸公伝』のほか、大江志乃夫『木戸孝允』（中公新書）、松尾正人『木戸孝允』（吉川弘文館）による伝記的研究が存在するが、前者は幕末、後者は王政復古以後に重点が置かれている。

本研究は、木戸が幕末の文久期に奉勅攘夷へと藩星を導き、大久保・西郷との角逐のなかで西南戦争中に病死するまで、国家構想のプランナーとして果たしてきた役割を追究することに力点を置いているが、重点課題を以下のように設定している。

- ①、薩長同盟成立前後における木戸の長州藩内におけるリーダーシップ確立と倒幕後の将来構想。
- ②、雄藩の割拠から郡県化による統一権力の構築という国家構想が形成された背景と、廃藩置県後の国家像の展望。
- ③、岩倉遣外使節団の副使として欧米を実見した木戸が、近代国家の政治システムである立憲制を日本の将来構想に必須な要素と認識していく過程。さらに、彼の文明観や宗教観に与えた影響。青木周蔵、品川弥二郎、桂太郎らドイツコネクションとの関係。
- ④、いわゆる「大久保政権」する批判的立場の実相と、華士族制度確立の構想。

2007年度の調査は、昨年度の成果を活かしつつ、下記の要領で進めた。

文献収集による先行研究の再検討を続行した。基本的文献からのデータ収集にくわえ、木戸に直接関わる一次的、二次的史料や藩外の人物の史料もくわえて検討を加えてカード化した。木戸が政局にどのように関与し、いかなる影響を与えたか、そしてどのような国家構想を抱いたかを追究するのが本研究の目的であるが、同時代の人物に木戸の存在がどのように認識されていたのかについても検証を試みた。

東京での史料収集は国立国会図書館憲政資料室で井上馨関係文書や伊藤博文関係文書、品川弥二郎関係文書、青木周蔵関係文書、桂太郎関係文書の調査を実施した。また、三井文庫の所蔵する井上馨関係資料も閲覧した。

旅費を使用しての現地調査は、今年度も山口県山口市および萩市を中心に進めた。山口市では、山口県文書館所蔵毛利文庫の調査を行い、山口県立文書館所蔵毛利文庫、周布家文書など諸家文書、山口県庁文書の調査を実施した。昨年実施した風聞探索書のほか、明治期に入って木戸と井上が深く関与した協同会社や先収会

## 国家構想の展開と木戸孝允

Development and Takayoshi Kido of a national design

落合 弘樹

OCHIAI Hiroki

この研究の目的は、大久保利通、西郷隆盛とならんで「維新三傑」に位置づけられ、明治維新の最大の功労者と評される木戸孝允（桂小五郎）の、近代国家形成に果たした役割を再評価しようとするものである。大久保や西郷、さらに木戸と同じ長州藩出身で思想的指導者

社の関連史料、さらには脱隊騒動や萩の乱関係の資料も調査した。このほか、防府や徳山などの現地調査も実施し、禁門の変後の木戸の潜伏先である兵庫県出石町も調査した。

研究成果報告書は、往復書翰からみた木戸孝允と井上馨を中心に検討を加えたが、概要は次の通りである。

長州閥の総帥として、政治の第一線に立つようになった木戸を、近い立場で支えた有力者の筆頭は、いうまでもなく伊藤博文と井上馨である。とくに井上は、年齢でも家格でも木戸に近く、本音を吐露できる間柄だった。木戸が井上に送った書翰は、国立国会図書館憲政資料室所蔵「井上馨関係文書」も、『木戸孝允文書』も明治2年(1869)のものが最初で、幕末期のものは残っていないが、井上が木戸に送った書翰は文久3年の洋行直前のものが最初となる。2月24日の書翰では、江戸から京都までの経費と愛人君尾の世話の依頼である。薩長連合成立に関しても井上は長崎で亀山社中や薩摩と交渉しており、高度な情報が多い。新政府成立後も、長崎の支配や財政の情報が井上から送られる一方、木戸も政府中枢の様子と自分の所信を具体的に伝えている。廃藩置県後、木戸は日本の急進開化の行方を危ぶむ一方、井上も開化を名目とする各省からの無秩序な予算要求に苦慮していた。明治6年に井上は下野し、木戸も体調を損なった結果、政局の中枢は大久保と大隈・伊藤が担うことになる。しかし、漸進的な立憲制度の樹立というプランニングは、将来構想として明確化され、また木戸が志向したドイツ式法制の導入は伊藤の憲法構想にも影響を及ぼすこととなる。

今後は、二年にわたる研究成果を集約し、得られた知見を加味しつつ、『ミネルヴァ評伝選木戸孝允』を年内に脱稿する予定である。